

盆土産（三浦哲郎）

梶原 悠平、川村 亮介、中寫 一貴、村井 隆人



一 作者と作品について

三浦哲郎（みうらてつお、一九三一〜二〇一〇年）は、青森県八戸市に生まれた。青森県立八戸高等学校を卒業後、早稲田大学政治経済学部経済学科へ進学したが休学し、八戸市の中学校で助教諭となった。その後早稲田大学第一文学部へ再入学した。在学中の一九五六年に新潮同人雑誌賞を受ける。卒業後、一九六一年『忍ぶ川』で芥川賞を受賞した。

『おろおろ草紙』、『白夜を旅する人々』、『じねんじよ』を含む『短編集モザイク』シリーズ、『少年讃歌』などの作品がある。

『盆土産』は、一九七九年一〇月、三浦が四八歳の時に、『海』に発表された。

二 叙述について

えびフライ、とつぶやいてみた。

唐突に出てくる「えびフライ」という単語。この物語に何か重要な役割を持って関わることを予感させる。つぶやいて「みた」とあるので、意図的につぶやいたものだとわかる。しかし、後の叙述から主人公は「えんぴフライ」と発音していることがわかるので、この「えび

フライ」は「えんぴフライ」と発音されたものだと考えられる。それはこのえびフライに「」がないことからわかる。

足元で河鹿が鳴いている。

河鹿とはカジカカエルのこと。カジカカエルは日本中に分布し、鳴き声が雄鹿に似ているのでその名がついた。美声の例えとしても知られ、夏の季語でもある。なので、この物語の季節は夏である。「足元で」とあるので、ここが水辺に近いことがわかる。また、鳴き声は聞こえているが、まだ姿は見えていない。

腰を下ろしている石の陰にでもいるのだろうが、張りのあるいい声がか川につけたゴム長のふくらはぎを伝って、ひざの裏をくすぐってくる。

「腰を下ろしている」から川にある石の上に腰かけていることがわかる。「いい声」ということから、河鹿のことを悪くは思っていない。むしろ心地いいくらいだろう。「くすぐってくる」とあり、「くすぐる」には「相手の心に働きかけていい気にさせる」とあることからそれがわかる。

この文中にある「が」は接続助詞の「が」であると考えられる。文意的に逆説ではないので、この「が」の働きを確定することは難しい。例えば推量と考えることもできる。仮に逆説だとすると、「腰を下ろし

ている……だろうが、私にはどこに在るのかわからない。」と「張りのあるいい声が……くすぐってくる。」の2つの文があり、「私には……わからない」の部分省略して、「張りのある……」の文をくつつけて一文にしたと考えられる。

つぶやくにしても声にはならぬように気をつけないと、人声には敏感な河鹿を驚かせることになる。

河鹿を気遣っている。また、河鹿の特性を知っていることから、河鹿を見るのはこれが初めてではない。「つぶやく」とはもともと小声であるが、その小声ですら河鹿は驚いてしまう。だから、声にならないようにしなければいけない。冒頭の一文が、つぶやき、つまり「外に向かって出している声」なのにもかかわらず、「がつかないのは、声になっていないからなのだろう。」

都会の人には造作もないことかもしれないが、こちらにはほとんどなじみのない言葉だから、うっかりすると舌をかみそうになる。

「都会」とあるので、舞台がその対比の「田舎」であると考えられる。そのためか「えびフライ」という言葉になじみがない。「とんと」とは「すっきり」「まったくと」という意味。つまりえびフライという言葉はこれまで全く知らなかった。「うっかりすると」とあるので、意識すればしっかりと発音ができるということか。

フライのほうはともかくとして、えびが、存外むつかしい。

「えび」という単語が特に発音できないようなので、「えび」になじみのない、海から遠く離れた場所であることが考えられる。しかし、

のちに「小えびなら知っている」ということが書かれるので、「えび」という発音ができないのは不自然でもある。

つまり、ここでの「むつかしい」というのは「えび」と言うことではなく、「都会」の人のように標準語で「えび」と発音することが「むつかしい」という意味だろう。

えびフライ。さつき家を出てくるときも、つい、唐突にそうつぶやいて、姉に、「まあ、えんびだ。なして、間にんを入れる？ えんびじゃねくて、えびフライ。」と訂正された。

「えびフライ」を単独で文にしている。ただし、ここでのつぶやきは「唐突に」である。物語の冒頭部分での「えびフライ」とは、つぶやき方が違う。ここで初めて「姉」が登場する。姉は「えびフライ」という発音がしっかりできているのだろう。また、主人公が「えび」のことを「えんび」と言っていることが分かる。これが「田舎」の方言なのだろう。それを訂正するということは、姉は「田舎」よりも「都会」の方が正しいと思っているのだろう。

「さつき」という表現から今（釣りをしているのが今）の話ではなく回想（釣りに行く前の出来事を振り返っている）であることがわかる。また家を出てから時間があまりたっていないことや家と川があまり離れていないことも予想できる。

自分では、えびと言っているつもりなのだが、人にはえんびと聞こえるらしい。

「らしい」とあるので、自分では間違いの自覚がない。しかし、姉に指摘されたので、人にどのように聞こえているかを推測できている。

それが何度繰り返しても直らない。

「何度繰り返しても直らない」ことから正しく発音しようと努力していることがうかがえる。父親から速達が来たのが夕べだから、そこからあるごとにえびフライを正しく発音しようとしたのだろう。あるいは無意識につぶやいてしまったのだろう。

けれども、そういう姉にしても、これから釣ろうとしている川魚のことを、いつもジャッコと言っている。

「けれども」といれることで、発音の間違いをしているのは自分だけではなく、「えびフライ」の発音を指摘する姉にも正しく発音できない単語がある、という表現になっている。さらに、これから釣ろうとしている川魚の話題を出すことで、主人公がなせ川の中にいるのかがうっすらとわかる（なぜ川魚を釣ろうとしているのかはまだ不明）。

分校の先生から、本当は雑魚というのだと聞いてきて、「ジャッコじゃなくて、ザッコ。」と教えてやっても、姉はジャッコと言うのをやめない。

「分校」とは「本校」の対義語で、地方に設けられる学校である。主人公は分校に通っている。その先生、つまり姉よりも知識のある人から聞いてきたことだといっても、姉は「ジャッコ」という。次の文に書かれているが、それは昔からずっと「ジャッコ」と発音してきたからだろう。「教えてやっても」とあることで自分と姉との関係を少し把握することができる。例えば「教えてあげた」や「言っただけ」などと比べると兄弟の間がある程度対等な関係であると推測できる。

「雑魚」には「ざこ」とルビが振ってあるのに主人公は「ザッコ」と発音してしまっていることからここでも本人は「ざこ」と言っているつもりだが、実際には「ざっこ」と発音してしまっていることが分かる。

もう中学生だから、分校の子供に物を教わるのはおもしろくないとみえて、うるさそうに、「そったらごと、とうの昔から覚えでら。」そう言っているながら、今朝もまき餌にする荳胡麻を牛乳の空き瓶に詰めているところへ起きてきて、「ジャッコ釣りな？ ……んだ、父っちゃんのだしをこさえておかねばなあ。」と姉は言った。

姉が中学生であることがわかる。「もう」とあることから姉はこの間までは小学生だったのでないかと考えられる。意地を張って、「ジャッコ」という言い間違いを否定しているが、無意識に「ジャッコ」という発音が癖になっている。「父っちゃん」から父親がいることが分かるが、この時点で出稼ぎをしていることなどはまだ分からない。

父っちゃんのだしというのは、父親の好きな生そばのだしのこと、父親はいつも、干した雑魚をだしにした生そばを食わないことには自分の村へ帰ってきたような気がしない、と言っている。

「父っちゃんのだし」という、読者にとってなじみのない単語を説明している。ここから、父親が帰ってくるのではないかという推測が建てられる。また、主人公の住んでいるところは「村」であることがわかる。

帰るなら、もつと早くに知らせてくれればこんなに慌てずに済むものを、

ゆうべ、いきなり速達で、盆には帰ると言ってくるのだから、面くらつてしまう。

「いきなり」とあるので、突然、父が帰ってくることに焦っている様子がうかがえる。また、あまりの突然の出来事に、いろいろな準備を短時間でやらねばならないことに焦りを感じている。「速達」を使うぐらいだから、急に休みが決まったのだろう。

明日はもう盆の入りで、殺生はいけないから、釣るものは今日のうちに釣っておかなければいけない。

盆の風習である。盆の風習を守るということは、伝統的な暮らしを続けていることが分かる。主人公は早く雑魚を釣ろうとしている。それほど、父親のために生そばのだしを用意しなければならぬという意志が強いのだろう。

今朝釣って、どうにか送り盆の晩には間に合うくらいだから、ゆうべは雨でも降って川が濁ったりしたらと、気が気ではなかった。

父の連絡がどれほど遅いものであったかを強調している。と同時に、何とかして父親のために雑魚を用意しようとしている主人公の気持ちが見取れる。「どうにか送り盆に間に合う」から、本当ならもっと早くに雑魚を釣っておく必要があったことがわかる。これが後に父が雑魚を一気に食べてしまう原因だと思われる。だしができるまで家にいることができないからだ。「今朝」という言葉から釣りは朝に行っていることがわかる。

えびフライ。

すでに四度目の登場である。今度は「気にかかっている」のではなく、常に意識の中心に「えびフライ」があることがわかる。突然「えびフライ」という一文を入れることで場面展開や主人公の思考の切り替えをスムーズにしている。

どうもそいつが気にかかる。

えびフライを「そいつ」と置き換えている。「それ」にくらべるとぞんざいな感じに聞こえる。

ゆうべ、といつても、まだ日が暮れたばかりのころだったが、町の郵便局から赤いスクーターがやってきたときは、家じゅうでひやりとさせられた。

父親は「村」と言っていたので、主人公の住む場所は「村」だと考えられる。ここでは「町」の郵便局からの速達が登場しているので、普段から手紙などを配達しにくる時間ではないのだろう。「ひやりとする」とあるのだから速達が着くということに良い思いはないのだろう。或いは時間帯も問題だったのかもしれない。「ゆうべ、といつても、まだ日が暮れたばかりのころ」とあることから時間的にはゆうべだが、夏なのでまだ明るいということがわかる。

東京から速達だというから、てっきり父親の工事現場で事故でもあったのではないかと思っただ。普段、速達などには縁のない暮らしをしているから、急な知らせにはわけもなく不吉なものを感じてしまう。

普段の生活に「速達」というものは馴染みがない。よって不吉なことが頭をよぎり、父親が事故にあったのではないかと推測している。

父親が「東京」の工事現場で働いていることが分かる。

ところが、封筒の中には、伝票のような紙切れが一枚入っていて、その裏に、濃淡の著しいボールペンの文字でこう書いてあった。

「ところが」から内容は想像していたような不幸なものではなかった。心配をよそに、封筒の中にはたったそれだけのものしか入っていないかったことを表現している。「伝票のような」という比喻表現によって紙の様子が安易に想像できる。「その裏」とあるので表裏が明確な紙であること、表には「伝票のようなもの」が書かれていることが想像できる。「濃淡の著しい」から父親が急いで書いたものと考えられる。

『盆には帰る。十一日の夜行に乗るすけ。土産は、えびフライ。油とソースを買っておけ。』

祖母と、姉と、三人で、しばらく顔を見合わせていた。

唐突に、盆に帰ることを宣言し、その明確な日時も指定している。速達で送ってくるほどだからよほど伝えたいことである。土産の話に触れて、ようやく「えびフライ」がなぜ先ほどから登場しているのかわかる。父の土産なのだ。三人が顔を見合わせていることから、あまりに意外な内容であったことがわかる。この時点で母親が出ないことにひっかかりを覚える人もいるだろう。

もちろん、父親が帰ってくれるのはうれしかったが、正直いって土産が少し心もとなかった。

「心もとない」とあるので土産が、なじみのない「えびフライ」であることを物足りなく思っている。「もちろん」から「正直いって」と

あることで、土産に対する物足りなさが強調されている。見たこともない食べ物だから、その価値を測りかねているからだろう。

えびフライというのは、まだ見たことも食ったこともない。

主人公はこのときに初めてえびフライと言うものが存在することを知った。

姉に、どんなものかと尋ねてみると、「どつたらもんって……えびのフライだえな。えんびじゃなくて、えびフライ。」姉は、にこりともせず「えび」と言っていて、あとは黙って自分の鼻の頭でも眺めるような目つきをしていた。

姉もえびフライがどんなものなのか見当がついていない。しかし、弟に対して知らないとは言えず、もつともらしく流している。また「えんびじゃなくて」と挟むことで弟の間違いを指摘している。「自分の鼻でも眺めるような目つき」とは、相手の顔を見ないで、下方向を眺めている目つきだ。この表現は姉がえびフライについて思いを巡らせているということだろうか。あるいはもう一度速達に目を通したのかもわからない。

けれども、両方いっしょにして、えびフライといわれると、急になんだかわからなくなる。

「えび」と「フライ」という言葉は知っているが、「えびフライ」となると全くぴんとこない。小えびと、フライとはどうやってもリンクできないのであろう。

そう言つて祖母に尋ねてみると、祖母は、そうだともそうではないとも言わずに、ただ、「……うめもんせ。」とだけ言った。

明確な答えを出さないので祖母がえびフライについて知っているのか、食べたことがあるのかはこの時点ではわからない。ただ、「……うめもんせ。」と言っているのだから聞いたことは有るのかもしれない。

だからこそ、気になって、つい、「えびフライ……。」と、つぶやいてみないではいけないのだ。

なぜ「えびフライ」と何度もつぶやいていたかがわかる。つぶやきの中でもいくつかは無意識のうちに発せられたものなので、意識の中心に「えびフライ」があることがわかる。

これはすこぶるまずいものだが、もうすぐうまいものが食えるのだから、今朝はあまり気にならない。

いつもは「まずい」と思っているのだろうが、今回は「えびフライ」を楽しみにしていて、気になっていない。しかし、いくら父親が買ってくるものとはいえ、おいしいという保証はない。ここでは「うまいものが食える」と断言している。それだけ土産に期待しているのだろう。

父親の土産のうまさをよく味わうためにも、かえって口の中をなるべくまずくしておくほうがいいのだ。

まだ、味がどんなものかわかっていないが、おいしいものだということを確信し、よりおいしく味わえるように工夫している。本当に「口の中をまずくしておくほうがいい」とは思っていないだろうが、そう

思うことですこぶるまずいものでも積極的に口の中に入れることができるということだろう。

すると、それを争つて食う雑魚の口で、川面はそこだけ夕立に打たれたようにあばたになる。

「あばた」とは痘瘡が治った痕のことである。雑魚の口が水面に出てきていることを比喻を用いて表している。人間にとってはまずいものだが、雑魚にとつて荏胡麻は、食べるために他と争うほどの御馳走である。雑魚の全身ではなく口だけがでているから余計に「夕立に打たれたように」見えるのだろう。

盆前で、あまり暇な釣り人がいなかったせいも、よく肥えた雑魚ばかりで、それがぴちぴちと砂の斜面を跳ねながら水辺に並べた小石の柵を越えそうになるから、思わず、「ばためぐなじゃ、こりやあ。」とどなりつけると、とたんに、足元の河鹿がぴたりと鳴きやんだ。

どこの家も盆の準備で忙しいことがわかる。そのおかげで良く肥えた雑魚がとれるが、小石の柵はいつもの雑魚を想定していたので、肥えた雑魚はでそうになり、思わず魚に怒鳴ってしまう。おそらく魚もおとなしくなったのだろうが、河鹿も鳴きやんでしまった。

「思わず」という表現や、冒頭から河鹿に気を使っている描写から主人公は河鹿の声を聞いていたかったのだろう。河鹿が鳴きやむことで朝の場面は終わる。場面転換。

「ぴたり」とあることで急にすっきりとまった印象がつく。

父親は、村にいるころから、うさぎの毛皮の防寒帽でも麦わら帽でもあ

みだかぶりにする癖があったが、今度も真新しいハンチングのひさしを上げて、はげ上がった額をまる出しにして帰ってきた。

防寒帽は冬、麦わら帽は夏なので一年中、そして村にいるころからなので昔から父親はあみだかぶりのスタイルを崩していないことが分かる。「真新しい」、そして「ハンチング」といったカタカナの表現から父が都会から帰ってきたという雰囲気は伝わる。「はげ上がった」や「まる出し」という表現は、父は髪に無頓着だが主人公は気になるのかもしれない。

見上げると、その広い額の横じわから上のほうは、そこだけ病んでもいるかのように生白かった。

この時まだ父は家の中に上がってないと後の文から推測できる。また「見上げると」という表現から、ここでは主人公がまだ小さくて土間の上においても父の方が高いのか、教科書の挿絵のように主人公が座っているのか、或いは二人とも座っていると考えられる。「病んででもいるかのように」という表現から主人公がそれを不安に感じていることがわかる。

どうやら、工事現場のヘルメットばかりは自分の流儀で気ままたかぶるというわけにもいかないらしい。

主人公はそれをヘルメットをかぶっているせいだと考えたようだ。そこでもいつもはあみだかぶりの父でも仕事の時はそのができない、仕事とはそういうものなのかしらと思っている。

「ばかりは」とあるからそれ以外では必ずあみだかぶりなのだろう。

淡い空色のハンチングは、まだ頭になじんでいなくて、谷風にちょっとひさしをあおられただけで慌てて上から押さえつけなければならなかった。

おそらく帰る直前に買ったと思われる。帽子と頭皮への考察が一通り終わったので次の場面に転換する。

土間の上がり框で、土産の紙袋の口を開けてみて、まず、盛んに湯気を噴き上げる氷にびっくりさせられた。

主人公はえびフライが入っているものと思っていたので余計にびっくりしたのである。「まず」とあるので、まだ驚くことがあるのだろう。

ぶつかき氷にしては不透明で白すぎる、なにやら砂糖菓子のような塊が大小合わせて十個ほどビニール袋に入っているの、これも土産の一つかと思つて袋の口をほじめてみると、とたんに中から、もうもうと湯気のようなものが噴き出てきたのだ。

はじめて見たものなのでドライアイスもお土産のように思えてしまう。展開で言うところの方が先か。ぶつかき氷や砂糖菓子のようなという描写から主人公はドライアイスを食べ物ではないだろうかと推測している。

びっくりして袋を取り落としたはずみに、中の塊が一つ飛び出した。

よっぽどびっくりしたのである。

「あ、もったいない。」と姉が言うので、急いで拾おうとすると、ちょうど囲炉裏の灰の中から掘り出したばかりの焼き栗をせっかちにつま

んだときのように、指先がひりつとして、二度びっくりさせられた。姉も主人公のようにお土産か何かだと思っただろう。主人公はドライアイスというものを知らないの、触ってはいけないドライアイスに触れてしまう。

そのうえそいつのほうから指先に吸い付いてくるので、慌てて強く手を振ると、そいつは板の間を囲炉裏の方まで転げていった。

「そのうえ」とあるのでここでも主人公は驚いている。ドライアイスをお土産だと思っていた主人公にとってはかなりの衝撃であったことが考えられる。

「そつたらもの、食っちゃなんねど。それはドライアイスつうもんだ。」と、父親が炉端から振り向いて言った。

父親がどのように言ったのかの描写がないので、父がどのような気持ちで言ったのかはわからない。父も最初は主人公のように食べ物の類だと思っていたのかもしれない。父親は靴を脱いでいるのだろうか、土産の方は向いていなかったことが分かる。おそらく主人公の驚いた声やドライアイスが落ちたりする音が聞こえたのではないだろうか。父は主人公を驚かせたくて、あえて何も教えずに土産を渡したのかもしれない。得体のしれない氷の正体が出てきたので場面転換。

それで父親は、そのドライアイスをビニール袋にどっさりもらって、道中それを小出しにしながら来たのだという。

後にわかるのだが父親は一日半しかいられない。それでも自分の疲れを取ることに子どもを喜ばせることを優先している。それだけ

エビフライを子供に食べさせたかったのだろう。父親は初めてエビフライを食べたときかなりの衝撃を受けたのだろう。

そんなにまでして紙袋の中を冷やし続けなければならなかったわけは、袋の底から平べったい箱を取り出してみて、初めてわかった。

ここでようやくエビフライに注目がいく。それまで主人公はなぜ父親が睡眠時間を削ってまでドライアイスを入れ替えていたのか、何を冷やさなければならなかったのかに注目がいく。それまではドライアイスに衝撃を受けていてエビフライのことは忘れていた。

その箱のふたには、『冷凍食品 エビフライ』とあり、中にパン粉をつけて油で揚げるばかりにした大きなエビが、六尾並んでいるのが見えていた。

エビフライを知らない割にはやや描写が説明的で腑に落ちない。パン粉を主人公は知っていたのだろうか。もしかしたら父親が教えたのかもしれないし、以前にフライが食卓に出たことがあるのかもしれない。ここではさらりと六尾とあるが、この時点で四人家族だということに言及していない。読者にとってはあと二人の家族の登場を思わせるかもしれない。しかし主人公にとって四人家族なのは自明なのだから、ここで六尾をどう配分するのだろうかと思わないのはそれだけエビフライが衝撃的なものであったのだろう。

えびフライといっても、まだ生ものだから、父親は家へ帰り着くまでに鮮度があやしくなったらいけないと思いき、ただこの六尾のエビだけのために、一晩中、眠りを寸断して冷やし続けながら帰ってきたのだ。

えびフライはフライされたものでなくまだフライされる前のものだった。主人公は冷凍食品というものを全く知らなかった、あるいは予想できていなかったということが考えられる。「ただこの六尾」という表現から主人公はエビはもっと多くあるものだとおもっていたのだろう。そして父親の苦勞を感じている。

それにしても、箱の中のえびの大きさには、姉と二人で目をみはった。

主人公だけでなく、姉にとっても衝撃だったことが分かる。えびの大きさは予想を超えていたことがわかる。主人公にとってのえびはただこの時点で沼に住むエビしか想像できていないからだ。

今朝釣ってきた雑魚のうちでいちばん大きなやつよりも、ずっと大きいし、よく肥えている。

エビが雑魚より大きい時点で主人公にとって不自然なのだろう。身に比べられる対象がない。

「ずんぶ大きかえん？ これでも頭は落としてある。」

父親は、満足そうに毛ずねをびしゃびしゃたたきながら言った。

父親は子どもたちの驚いた顔を見て満足そうである。毛脛をたたく描写から足を組んで座っていることがわかる。

いったいどの沼でとれたえびだろうかと尋ねてみると、沼ではなくて海でとれたえびだと父親は言った。

自分の日常で考えてしまうので海という発想がなかった。主人公の住む場所の近くには海がないことがわかる。

「これは車えびつうえびだけど、海ではもっと大きなやつもとれる。長えひげのあるやつもとれる。」

父親が珍しくそんな冗談を言うので、思わず首をすくめて笑ってしまった。

父親は冗談を言っていないのに、少年は冗談だと理解した。主人公の田舎者っぷりがわかる。「珍しく」から父親は普段はあまり冗談を言わないということもわかる。

午後遅く、裏の谷川のよどみに漬けておいたビールを引き揚げて戻ってくると、隣の喜作が独りで畦道をふらついていた。

主人公の家には冷蔵庫がないことがわかる。おそらく近くの家庭も冷蔵庫はなくて裏の谷川でものを冷やしているのではないだろうか。

喜作はそこにもものを取りに行く主人公、あるいは子どもたちをまぢぶせしていたのではないか。「ふらついていた」からあまり用が感じられない。

隣でも父親が帰ったとみえて、真新しい、派手な色の横縞のTシャツをぎごちなく着て、腰には何連発かの細長い花火の筒を二本、刀のように差していた。

喜作の父親も東京、あるいは町や都会に出稼ぎに行っているのだろう。それは喜作の父親が買ったであろう派手なTシャツなどの土産からわかる。「ぎごちない」とあるので、田舎の風景や田舎育ちの喜作に都会の派手なシャツは似合わないと思われて判断している。

「父つちや、帰ったてな？」喜作は一級上の四年生だが、偉そうに腕組みをしてこちらのぬれたビールをじろじろ見ながらそう言うので、「んだ。」とうなずいてから、土産は何かときかれる前に、「えびフライ。」と言った。

喜作は父親から土産をもらって気分が高まっているので偉そうなのだろう。単に級が一つ上なので普段から偉そうにしているとも考えられる。じろじろ見るのは、まず主人公が冷やしていたものがビールであったことから主人公の父親が帰ったのだと思つたのと、主人公の格好からは土産が確認できないので、ビールの中に何か土産はないのだろうかと探っていたのだろう。主人公はそういった喜作の態度から土産は何なのか聞かれそうなのを察知して先に答えた。

喜作は氣勢をそがれたように、口を開けたままきよんとしていた。

先に答えられたことから何となくそれが土産であろうことが分かっている。また、聞いたことのない単語だったので余計によく聞こえなかつたのだろう。喜作の先ほどまでの偉そうな態度が崩れてしまっている。

「……なんでえ？」

「えびフライ。」

「……えびフライって、何せ。」

それが知りたければ家に来てみる。そう言いたかつたが、見るだけでももつたいたいのにな、ついでに一口と言われるのが怖くて、「なんでもねつす。」と通り過ぎた。

はじめ、主人公はエビフライのほう喜作の土産よりもすごいぞ！

と思つて発言したが、それが何なのかを特に喜作に教える義理はないし、言ってしまったばかりに取られるのも嫌だったので回避した。エビフライをしらない喜作に優位性を感じている。

普段、おかずの支度はすべて姉がしているが、今夜はキャベツを細く刻むだけにして、フライは父親が自分で揚げた。

普段は姉がしているという表現から母親が家にいないであろうことがわかる。父親しか作れないということもあるが、父親が普段いなくても振り舞いたいということや、せっかくのエビフライを子どもに作ってやりたいという気持ちもあるだろう。

煮えた油の中でパン粉の焦げるいいにおいが、家の中にこもった。

「こもった」とあり、パン粉のにおいが充滿した。食事の雰囲気も広がっていく。

四人家族に六尾では、配分がむつかしそうに思われたが、父親は明快に、「お前と姉は二匹ずつ食え。おらと婆つちやは一匹ずつでええ。」と言つて、その代わりに、今朝釣ってきた雑魚をビールの肴にした。

四人家族という表現から母親がいないことがわかる。いいにおいがしてきたことで物珍しかったエビフライが具体的な食べ物へと変わっていく。それによつて六尾だと四人で分けられないと思ひ、自分がどれだけ食べられるのかを気にした。その不安に対して父親は、明快に答えている。父親は子どもたちにエビフライを味わってほしかったのだろう。「その代わりに」からの表現は父親が言葉にしたのではなく、そのあとの父の行動から主人公が推測した。

串焼きにしたまま囲炉裏の灰に立てておいたのを、あぶり直して、一尾ずつ串から抜いてはしょう油をかけて食った。

雑魚はおそらくそのまま囲炉裏で乾燥させておくつもりだったのだろう。しかし、だしになるぐらい乾燥させるには盆の暮れまで乾燥させる必要がある、父親にはそれを待っている時間はない。少しでも故郷の味を多く食べたくて、村に帰った気持ちになりたかったのだろう。

ビールは三本あるから、はらはらして、「あんまり食べば、そばのだしがなくならえ。」と言うと、父親は薄く笑って、「わかっただけに。人のことは気にしねえ、えびフライをじつくと味わって食え。」と言った。

ビールはまだ一本目のだろう。このペースだと雑魚が出汁にできなくなるのを主人公は心配している。「薄く笑って」から父はそばのだしが取れるまで村に入れないことを自覚していることがわかる。父親は今はそのことよりも、エビフライを味わってほしいと考えている。

揚げたてのえびフライは、口の中に入れると、しゃおっ、というような音を立てた。かむと、緻密な肉の中で前歯がかすかにきしむような、いい歯ごたえで、この辺りでくるみ味とっているえもいわれないうまさ口の中に広がった。

えびフライのおいしさを表現した一文。歯ごたえ、味、二つの視点から褒めることで、えびフライがいかにおいしかったかがよく伝わる。

二尾も一度に食ってしまうのは惜しいような気がしたが、明日からは盆で、精進しなければならない。

逆説に「が」を使っている。一見逆説になっていないように見える。書かれてはいないが、精進しなければならぬので、二尾とも一度に食べてしまおう。といった意味が含まれているので、逆説になっている。

最初は、自分のだけ先になくならないように、横目で姉を見ながら調子を合わせて食っていたが、二尾目になると、それも忘れてしまった。

「自分のだけ先になくならないように」とあり、小学生らしい思考をしている。中学生の姉はそんなことを気にせず食べている様子である。なぜ二尾目になると、それも忘れてしまったのだろうか。えびフライがえもいわれないうまさで食べることに夢中になってしまったからだろう。「それもわすれてしまった」の「も」の意味はなにだろうか。ここの「も」は同種の事物の列挙では使われていない。猿も木から落ちるの「も」と同じ「さえ」という意味合いで使われている。

「歯がねえのに、しつぽは無理だえなあ、婆っちゃん。えびは、しつぽを残すのせ。」と、父親が苦笑いして言った。

「苦笑いして」とあるが、苦笑いというのは普通決まりの悪い時に使う。ここでは、自分のお土産であるえびフライでむせたことと、しつぽは残すものだというのが遅かったこととの、二点からきまりが悪かったのだろう。

そんなら、食う前にそう教えてくれればよかった。

「そんなら」は、それならば。会話は方言満載だが、地の文で方言はここまで使われていない。「そうおしえてくれればよかった」とあ

り、もうしつぽまで食べちゃったよということ。

姉の皿を見ると、やはりしつぽは見当たらなかった。

僕はしつぽまで食べてしまったものだから、姉はどうか気になったのだろう。「やはり」とあるので、「言われなかったら食べてしまうよね」という気持ちがあるので。

姉もこちらの皿を見ていた。

僕と同じように姉も。つまり、考えていたことは二人とも一緒だったのだろう。

顔を見合わせて、首をすくめた。

「顔を見合わせて」ではなく「顔を見合わせて」となっている。「顔を合わせる」の「面と向かい合う」の意味と、「見合わせる」の「互に見る」の意味を合わせたものであろう。「首をすくめる」とは恐れ入ったり、困ったりしたことを示す。

「歯があれば、しつぽもうめえや。」

姉がだれにもなくそう言うので、「んだ。うめえ。」と同調して、その勢いで二尾目のしつぽも口の中に入れた。

「しつぽは残すもんだよ」と聞いてショックを受けていたが、「歯がねえのに、尻尾は無理だよなあ」という言葉を思い出して、自分には歯があることを生かし、尻尾を食べてしまったことを肯定している。「誰にもなく」とあるので、ひとり言のようなものだろうか。姉は自分を納得させるために言ったのではないだろうか。それに気づいた

僕は「んだ。うめえ。」と同調することで、姉の言うとおりだということと、しつぽは食べるものなんだと自分で自分を言い聞かせている。さらに、その勢いで二尾目のしつぽを食べることでしつぽは食べるものなんだと納得している。

父親の皿には、さすがにしつぽは残っていたが、案の定、焼いた雑魚はもうあらかたなくなっていた。

「さすがに」とあるので、そうはいつでもやはりという意味。雑魚はあらかたなくなっていたということが、「さすがに」なのか。それとも歯があればしつぽもうまいと僕と姉がしつぽを食べたことに対して「さすがに」なのか。「案の定」という言葉があるので、雑魚があらたなくなることが僕に予想できていたという事がわかる。

翌朝、目を覚ましたときも、まだ舌の根にゆうべのうまさが残っていた。「残っていた」とあり、それほどえびフライのうまさや衝撃的だったという事が分かる。作者は昨日の夜の事を昨夜とはいわず、ゆうべと表現している。そのほうがあたたかな感じがするからだろうか。

あんなにうまい土産をもらったのだから、今朝もまた川へ出かけて、そばのだしを釣り直してこなければならぬと思っていたのだが、その必要はなかった。

そばのだしに使う分の雑魚までゆうべ食べてしまったから、お土産の礼として釣りをしておこようと思った。お土産がうまかったから釣りをしておこなければならぬと思った。

父親が、一日半しか休暇をもらえなかったので、今夜の夜行で東京へ戻ると言い出したからである。

この文章の地の文はすべて僕目線で書かれている。「一日半しか」という表現から、僕が父親の滞在を短いと感じていることが分かり、もう少ししてほしいと感じていることがうかがえる。「言い出した」とあり、他に先駆けて言った。僕が「明日の分の雑魚をとってこようか」と父親に言う前に言ったのだろう。

どうりで、ゆうべは雑魚の食いが尋常ではないと思ったのだ。

「どうりで」とあり、前文を受けてなるほど僕は思ったのだろう。「尋常ではない」とは、普段とは違うということ。

午後から、みんなで、死んだ母親が好きだったコスモスとききょうの花を摘みながら、共同墓地へ墓参りに出かけた。

ここで母親がすでに亡くなっていたことが語られる。父親が一日半しか休みをもらえなかったのにもかかわらず、帰って来たのはこの墓参りが一番大きな動機だったのだろう。コスモスの花言葉は「乙女の真心」「乙女の愛情」「少女の純潔」。ききょうの花言葉は「変わらぬ愛」「気品」「誠実」「従順」。父親の妻への変わらぬ愛を表現しているようである。

盛り土の上に、ただ丸い石を載せただけの小さすぎる墓を、せいぜい色とりどりの花で埋めて、供え物をし、細く裂いた松の根で迎え火をたいた。

「せいぜい」とは力の限りを尽くすこと。「小さすぎる」と表現して

いることから、僕はこの墓では不十分で、もっと大きくても良いと感じている。だから、できるだけ、彩やかにし、供え物をし、豪華に見せている。

祖母は、墓地へ登る坂道の途中から絶え間なく念仏を唱えていたが、祖母の南無阿弥陀仏は、いつも『なまん、だあうち』というふうに聞こえる。

「絶え間なく」は切れ目なくという意味。次の「合間に混じる」への伏線か。「いつも」とあるので、墓参りには今までにも祖母と何度もきていることが分かる。

ところが、墓の前にしゃがんで迎え火に松の根をくべ足していたとき、祖母の『なまん、だあうち』の合間に、ふと、「えんぴフライ……。」という言葉が混じるのを聞いた。

「ふと」とあるので、不意に聞いた。

祖母は歯がないから、言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんぴフライという言葉をもたらしたのだ。

「確かに」があることで自分の中に確証を得ている感じがする。また、相手に訴えかけるようなニュアンスも受ける。

祖母は昨夜の食卓の様子を（えびのしっぽがのどにつかえたことは抜きにして）祖父と母親に報告しているのだろうかと思った。

（ ）の言葉を入れることで、昨夜の食卓の様子を読者に思い出させる効果がある。また、祖母が都合の悪いことは語りたがらない性格

だと主人公が考えていることも分かる。

そういうえば、祖父や母親は生きていうちに、えびのフライなど食ったことがあったらうか。

「そういうえば」とあるので、僕はふと気になった。「えびフライ」ではなく「えびのフライ」といつている。そうすることで、より、えびをフライしたものであるというのが強調されているように思われる。

祖父のことは知らないが、まだ田畑を作っているころに早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなからうか——そんなことを考えていううちに、なんとなく墓を上目でしか見られなくなった。

「祖父のことは知らないが」とは祖父がえびフライを食べたことがあるかは知らないが、という意味。祖父の記憶はないのだろう。「なんとなく」とあるので僕にははっきりした理由が分かっていない。「上目」とは顔を上げないで目だけで上の方を見ること。何故だか顔を上げられなくなった。申し訳ない思いがしたのかもしれない。

父親は、少し離れたがけつぶちに腰を下ろして、黙ってたばこをふかしていた。

「少し離れた」とあるが、一人になりたいのだろうか。「黙ってたばこをふかしていた」とあるので、妻との思い出に浸っているのかもしれない。妻にもえびフライを食わせてやりたかったと思っているのかもしれない。

父親が夕方の終バスで町へ出るので、独りで停留所まで送っていった。「独りで」とあるので、姉は一緒ではない。「終バス」から父親がぎりぎりまでいたことがわかる。

谷間はすでに日がかげつて、雑魚を釣った川原では早くも河鹿が鳴き始めている。

「すでに」からは、夏が少しずつだが終わりをかけていることを思わせる。「早くも」からは、河鹿が夜に鳴くことを受けているのだろう。主人公はまだそんなに遅くないと思っていたのではないだろうか。父との別れが着々と近づいてきている。

村外れのつり橋を渡り終えると、父親はとって付けたように、「こんだ正月に帰るすけ、もつとゆつくり。」と言った。

「とって付けたように」とあるので父親の言い方が不自然でわざとらしくかった。息子がさみしそうにしていたからだろうか、励まそうと思つたら、わざとらしくなってしまったのだろう。

すると、なぜだか不意にしゃくり上げそうになって、とつさに、「冬だから、ドライアイスもいらねべな。」と言った。

父親の前で泣きたくなかったのだろう。それで、とつさに口から出た。「しゃくり上げそう」とあるので泣きかけている。

バスが来ると、父親は右手でこちらの頭をわしづかみにして、「んだら、ちゃんと留守してねな。」と揺さぶった。それが、いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した。

「いつもより」とあることから、頭をわしづかみにして揺さぶるのは恒例なのだろう。ただそれが、少し手荒くて僕は「なんで？」となつてゐる。恐らく、いつもよりさみしそうにしている僕の様子に気づき、元気づけようと思つていたら、手荒くなつてゐたのだろう。

「うっかり、さいなら、と言つつもりで、うっかり、「えんぴフライ。」と言つてしまった。

「うっかり」とあるので、つい出てしまった。それほどまでにえんぴフライに心ひかれていたのだろう。

バスの乗り口の方へ歩きかけていた父親は、ちょっと驚いたように立ち止まつて、苦笑いした。

この苦笑いはうれしかったという表現だと思われる。お土産を気にいつてくれたことがうれしくて、それがぼろっと口から出てしまつてゐる息子を見ておかしかったのだろう。

「わかつてらあに。また買つてくるすけ……。」

「……」がまだ何か言いたげである事を示している。

父親は、まだ何か言いたげだったが、男車掌が降りてきて道端に痰を吐いてから、「はい、お早くう。」と言つた。

「道端に痰を吐いてから」とあるが、なくても全く支障のない言葉である。これをつけることで男車掌⇨父親を連れていくやつ⇨嫌な奴という少年のイメージが垣間見える。

父親は、何も言わずに、片手でハンチングを上から押さえてバスの中へ駆け込んでいった。

「何も言わずに」とあるので、別れの時は何も言わないという男の美学を感じる。それとも車掌にせかされたせいで言えなかったのか。

三 考察

(一) 物語の舞台について

物語は、青森県の田舎の村を舞台にしている。三浦哲郎は、彼の出身地でもある青森県を舞台にした作品が多く、この作品も彼の持ち味が存分に出的作品であると考えられる。では、どうして舞台を田舎の村にしたのだろうか。それは、普段は遠くに暮らしている家族が、久々に再会するという場面を演出するためではないだろうか。主人公は田舎に姉と祖母と三人で暮らしていて、母親が他界している。父親は出嫁ぎに出ており、一緒に暮らしてはいない。普段は一緒に暮らしていない家族が、盆に再び集合し、家族だんらんのひと時を過ごす、という状況を演出している。また、彼が幼少期を過ごした青森の田舎は、舞台として書きやすかったのではないか。よりリアルな世界観を描き出すのに適した舞台だったといえる。

(二) 物語のテーマについて

この物語のテーマは、「家族」ではないだろうか。普段は別々に暮らす父親との久しぶりの再会や、墓参りを通して、生きてゐるものだけでなく、この世のものではなくなつてしまつた家族との交流も描いてゐる。長い休みが取れずに盆の帰省を断念していた父親が、突然帰る

ことを決意し、短い休みの間に田舎に帰ってくる。それは、「家族」を大切にしているということではないだろうか。また、突然帰ってくる父親のために、急いで準備をする主人公たちも、「家族」を大切にしているといえるだろう。それだけでなく、墓参りを通して、亡くなった家族とも交流し、敬っている。家族は死んでも家族なのだ。

(三) えびフライについて

主人公にとって、えびフライは未知の食べ物であった。未知とはいっても、「えび」と「フライ」は知っている。この二つの組み合わせが想像できないのだ。中途半端な知識が、ますます「えびフライ」の想像を混乱させるのである。

この物語は、主人公が「えびフライ」とつぶやくところから始まる。未知の食べ物である「えびフライ」を、主人公は何度も口にかけている。そして物語の最後の主人公のセリフも「えびフライ」である。えびフライを食べる前も、食べた後も、彼にとって「えびフライ」は非常に大きな存在だったといえる。

主人公は、「えびフライ」を正確に発音できず、「えんびフライ」と言っていて、それを姉にも指摘されている。そういう姉にとっても、えびフライは未知の食べ物であり、長年生きてきている祖母でも食べたことのないものだった。田舎に暮らす人たちにとってもなじみのないものである。海に大きなえびがいることを信じない主人公や、えびのしっぽまで食べてしまう祖母など、滑稽な言動を演出する効果を發揮している。

家族の中で唯一、えびフライはいかなるものかを知っている父親は、えびフライを自ら揚げたり、子ども二人に多めに食べさせたりと、優

しさを見せている。また、えびフライをドライアイスで冷やしながら、腐らないように持って帰ってきているところにも思いやりを感じる。「えびフライ」は父親の優しさを表す効果も持っている。父親にとって「えびフライ」はあくまでも「盆土産」であり、帰省の本来の目的は墓参りや家族との再会である。

主人公は墓参りの際に「祖父のことは知らないが、まだ田畑を作っているところに早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではなからうか。」と考えている。おそらく今まで考えたこともないことだろう。えびフライとの出会いによって、先に死んでいた肉親のことをじっくりと考える機会を得ているのだ。これもまた「えびフライ」の存在意義ではなからうか。